

令和元年9月15日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07170

研究課題名(和文) 日本古典文学のジャンル・翻訳・ジェンダー 『枕草子』と平安時代文学を中心に

研究課題名(英文) Genre, Translation, and Gender in the Japanese Classics: with Special Focus on Makura no Soshi and Heian Period Literature

研究代表者

常田 槇子 (Tsuneda, Makiko)

早稲田大学・文学大学院・助教

研究者番号：20801781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主にフランスとアメリカにおける『枕草子』の翻訳をケース・スタディとして扱い、国際的受容により変容する日本古典文学の実態を、特にジャンルとジェンダー、翻訳をキーワードに解明することを目指した。翻訳の問題については、関連する作品としてレオン・ド・ロニーが1871年に著したAnthologie japonaise『詩歌撰葉』を取り上げ、翻訳の特徴や書評をはじめとする出版にまつわる様々な事項を明らかにした。『枕草子』については、女性読者と作品の関わり方を重点的に調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

レオン・ド・ロニーの『詩歌撰葉』に関しては、これまで翻訳者ロニー自身への関心が主であり、その本文や翻訳方法の特徴、書評などについての具体的な考察はなされてこなかった。その意味で、洋の東西を問わず文学に共通性を見出そうとするロニーの姿勢についての分析、またその書評の紹介には、学術的な意義が認められるであろう。また、『枕草子』については、作品の機能面から考察しようとする姿勢が、新たな研究の視座を提案するものとして意義があるものとする。

研究成果の概要(英文)：In this research, I attempted to reconsider the reception of Sei Shonagon's *Pillow Book* by exploring the history of its generic classification as a "miscellaneous writing" or "essay" (*zuihitsu*), and suggested instead that the *Pillow Book* should be considered in terms of its active usage, rather than its genre. This is because the *Pillow Book* played a part in the construction of female social norms.

I also examined *Anthologie japonaise* written by Leon de Rosny in 1871. In my papers, I argued that the characteristics of his translation make clear that his work implied the universality of human beings' ideas, which is unusual considering the period. I also introduced its book reviews and other aspects of its reception that had previously not garnered any scholarly attention.

研究分野：中古文学

キーワード：翻訳 ジェンダー ジャンル 中古文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本古典文学の翻訳研究は個別には進みつつあるが、自身の研究の反省も含めて古典文学の翻訳研究の問題を述べるならば、次の2点である。

①現代では『源氏物語』などの日本の古典文学が普遍的価値をもつ「世界文学」として認識されているが、欧米を規範とする世界文学の概念と平安文学の実態の間の齟齬が見過ごされていること

②個々の翻訳研究が、必ずしも全体的な議論に結びついてはいないこと

『枕草子』のフランス語訳については、これまでまったく研究の俎上に載せられることがなかったが、『枕草子』は上記の問題を克服する材料を提供している作品であると考えられるので、主に『枕草子』の英訳とフランス語訳に注目して研究を進めることとした。

2. 研究の目的

『枕草子』はこれまで「随筆」に分類され、外来語「エッセイ」と合わせて無批判に用いられてきた。しかし、『枕草子』にそもそも日記的章段、類聚章段などと呼ばれる章段があることは知られており、また近年山中悠希『堺本枕草子の研究』(武蔵野書院、2016年)が精緻に分析したように、堺本『枕草子』は随筆とはいがたい側面を持っている。外来語も含め、「随筆」の定義を捉え直す必要があると考えた。

また、『枕草子』には、女性・男性に対する批評が随所に見られるが、このようなジェンダーにまつわる表現や言説と翻訳の関係はほとんど論じられていない。文学研究、ジェンダー研究、翻訳研究を結びつける新たな枠組みを構築することで、古典文学の翻訳研究を進展させることを目指した。

さらに、本研究におけるジャンルとジェンダーについての考察に関しては、「multi-functionality (=多機能性)」という考え方の導入が有効であると考えられる。古典文学ないしその翻訳がもつ多様な機能に注目することで、作品を位置付けようとする狙いである。

本研究は、以上の認識に基づき、主にフランスとアメリカにおける『枕草子』の翻訳を、ケース・スタディーとして扱い、国際的受容により変容する日本古典文学の実態を、特にジャンルとジェンダーという2つの観点から解明することを目的とした。

3. 研究の方法

「随筆」と「エッセイ」の見直しについては、以下の手法をとった。

(1)主に欧米で出版される日本文学のアンソロジーや翻訳作品で、*novel* に分類される作品を調べ、欧米基準でジャンル分けされることを問題化する。

(2)ミシェル・ド・モンテーニュの *Essais* (1588年)およびフランシス・ベーコンの *Essays* (1597年)に基づき、*Essai/Essay* の当初の枠組みを整理する。その上で、超絶主義作家として知られる、R・W・エマソン、D・ソローら以降の作家たちによる *Essay* の認識を明らかにし、欧米におけるジャンルとしての *Essai/Essay* の展開をおさえる。

(3)日本における「随筆」の語史を整理するとともに、明治期の資料を中心に *Essai/Essay* の訳語として「随筆」が定着する経緯を明らかにする。外来語「エッセイ」が用いられるようになる経緯を、欧米の規範意識も併せて、考察する。

女性読者と『枕草子』については以下の手法をとった。

(4)山中悠希『堺本枕草子の研究』(武蔵野書院、2016年)に拠りながら『枕草子』の特性を整理し、「随筆」とはいがたい側面を検討する。

(5)『枕草子』について、鎌倉時代から江戸時代にかけての受容状況を、作品の機能という観点から、日記や雑記を中心に分析する。特に女性がどのように『枕草子』を読んできたのか、ジェンダーの観点から検討する。そして、江戸時代には「女性の指南書」として享受されていたことなどを明らかにし、(4)で検討した「随筆」とはいがたい点とあわせ、「作品の機能」からの作品理解を提案する。

4. 研究成果

2017年度は研究を進めるなかで、レオン・ド・ロニー (Leon de Rosny, 1837-1914) が1871年に上梓した和歌の翻訳・解説書である *Anthologie japonaise : poesies anciennes et modernes des insulaires du Nippon* (著者による邦題は『詩歌撰葉』) についても研究する必要が出てきた。同書についてはほとんど研究が進んでいないが、最初期の日本文学のフランス語訳の例として極めて重要だからである。

そこで、2017年3月には、早稲田大学で国際ワークショップ「日本文学のネットワーク 重なり合う言説・イメージ・声」を主催し、ロニーの『詩歌撰葉』が世界各国の文学と日本の和歌を比較するという手法で、日本文学を紹介していることなどについて報告した。本国際ワークショップではほかに国内外で活躍する若手研究者7名にも登壇してもらい、日本文学を題

材にとりながら、本研究課題とも関わる、翻訳、ジャンル意識、ジェンダーの問題も合わせ、多角的な観点から考察してもらおうとともに、全体で議論を行った。平安時代文学に限らず、上代から現代まで様々な時代の作品や作家について、上述の問題意識も含めた多様な観点からの議論とその共有ができたことは、本研究のテーマの理解を深める上で重要であったと考える。

2018年度は、『詩歌撰葉』についてさらに掘り下げ、2本の論文を掲出した。同書からは文学の普遍性への信奉といったものが見て取れ、翻訳の問題にとどまらず、時代や社会を反映するものとして、当初の研究動機にも通じるものであったと考える。

また、『枕草子』については、「随筆」という分類を批判的に見直すとともに、特に『枕草子』を読むことが、女性読者にとってある種の規範となっていたことから、作品の機能面から論じることを提案し、学会で報告する予定である。この点については、ジェンダー研究に取り組む研究者と応募した Asian Studies Conference Japan でのパネル発表に採択され（パネル題目：Female Authorship, Readership, and Reception of Premodern Japanese Literature）2019年6月に発表することが決まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2件)

常田槇子、19世紀フランスにおける和歌集の編纂 レオン・ド・ロニーの実践、中古文学、第102号、2018年11月、pp. 61-69

常田槇子、日本文学の越境と交流 *Anthologie Japonaise* 『詩歌撰葉』をめぐって、近代日本文学はいかに形成されたか 学知・翻訳・蔵書、勉誠出版、2019年、pp. 200-217

〔学会発表〕(計 3件)

常田槇子、19世紀ヨーロッパが日本の和歌に出会ったとき / Rencontre européenne avec la poésie japonaise au XIX^e siècle、日本文学・文化国際研究会、於早稲田大学、2018年3月

常田槇子、19世紀フランスにおける和歌集の編纂—レオン・ド・ロニーの実践、2018年度中古文学会春季大会、於日本大学、2018年5月

Tsuneda Makiko, Female Readers of Sei Shonagon's *Pillow Book*: Genre, Usage, and Readership in the Reception of a Japanese "Essay", Asian Studies Conference Japan, Saitama University, 2019.6

〔図書〕(計 1件)

常田槇子 他(共編)、日本文学のネットワーク 重なり合う言説・イメージ・声、2018年、全153頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。